

烏山城

烏山城跡

烏山城の沿革

応永24年(1417)※、那須氏一族の沢村五郎資重によって築城されたとされています。それ以後、天正18年(1590)に当主那須資晴が、小田原遅参を理由に豊臣秀吉によって改易されるまで、那須氏の居城となりました。

戦国末～江戸中期においては、織田氏、成田氏、松下氏、堀氏、板倉氏、那須氏、永井氏、稲垣氏と頻繁に城主の交代が行われ、万治2年(1659)、時の城主であった堀親昌によって、城の東山麓に新たな居館(三の丸)が築かれ、以後の藩政機能はこちらに移ることになりました。

享保10年(1725)になると、譜代大名の大久保常春が江州(現:滋賀県)より移封され、その後八代、約140年にわたって大久保氏が城主になり、城は明治を迎え廃城となりました。

※応永25年(1418)の説もあり、これは応永24年2月築城開始、翌25年正月に完成、入城という古記録の記載によるものです。築城の由来に関しては、これらの説を含め諸説ありますが、考古学的にはまだ詳細不明であり、正確な築城時期は不明です。

9



本丸高段部分法面

もとの岩盤(↓)も上手く利用して段を作っています。

10



本丸高段部分出土(肥前)

江戸時代(18世紀初頭)のものか?

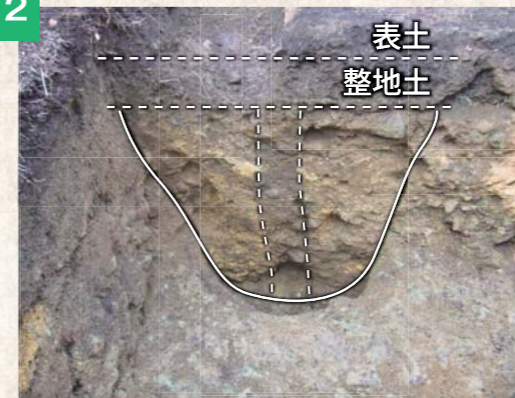
11



古本丸西側土塁断ち割り

排水を考慮して、砂利、砂、土、粘土を層状に積んでいます。

12



掘立柱痕跡

タテに黒く見える部分が柱の痕跡。その上に整地された時の土層があることから、穴と整地面との間に時期差が考えられます。

13



かわらけ出土状況

「かわらけ」と呼ばれる素焼きの皿が100枚近く発見されました。

7



本丸平坦面礎石

本丸御殿の一部か? 多くの礎石が発見され、複数時期の建て替えが推測されます。また、建物の周りには砂利が敷かれていたことがわかりました。

調査の軌跡

これまで確認調査を行った本丸、古本丸について写真で紹介いたします。草や腐葉土などに埋もれていた、鳥山城が使われていた時代の痕跡を発見することができました。

写真番号は右図の場所を指しています。右中段から時計回りにご覧いただくと常盤曲輪石垣から本丸、古本丸と調査した場面が並びます。



8



礎石(拡大)

黒く線のように柱があった痕跡が見えます。右端には赤く焼けている部分が見られることから火を受けたと考えられます。

1



常盤曲輪石垣(吹貫門脇石垣)

自然石をあまり加工せずに積み石として用いた野面積みという技法による石垣。

目地の隙間も広く小詰石も少ないが石が動く余地のないように組み合っています。

常盤曲輪の大手道に面しており、吹貫門跡から約30mにわたり現存。石積みは最高で約3m残っており、扇の様な反った勾配はなく直線的です。

6



L字に曲がる石列

敵が最短距離で移動できないように障壁を設けていることがわかります。

5



本丸石垣前斜面の石段

正門から本丸平坦面までは、本丸石垣(正門脇石垣)の前面を大手道が通り、本丸に向けて傾斜しています。

4



本丸石垣(正門脇石垣)

隙間がなく表面も平らに加工された切込ハギという技法による石垣。中央付近は震災により崩壊寸前です。

3



正門付近

方形に整えられた石材(↓)が正門。

2



吹貫門付近石列

谷側からの写真で奥が正門になります。

烏山城縄張り図

作図 杉浦昭博氏



0m 100m
1:2500

烏山城は、地元では八高山(標高206m)と呼ばれる喜連川丘陵の一支脈である独立丘陵頂部を中心として築かれた、連郭式の山城です。東西に約350m、南北に約600mの範囲に五城三郭(①本丸、②古本丸、③中城、④北城、⑤西城、⑥常盤曲輪、⑦若狭曲輪、⑧大野曲輪)と呼ばれる曲輪群が存在しています。①本丸・②古本丸と市街地との比高は約100mであり、曲輪群の周囲には竖堀、横堀、堀切、土塁などが設けられ、本丸周辺には石垣を築くなど堅固な城砦を形成しています。

万治2年(1659)、時の城主であった堀親昌によって、城の東山麓に新たな居館(⑨三の丸)が築かれました。

- ①本丸
- ②古本丸
- ③中城
- ④北城
- ⑤西城
- ⑥常盤曲輪
- ⑦若狭曲輪
- ⑧大野曲輪
- ⑨三の丸



桜門
主郭部の搦手門です。

十二曲口
七曲口と併せて整備された登城口(搦手口)です。

本丸(二の丸)
明応年間(一四九二〜一五〇二)、那須資実が行った城域拡張の際に築かれたと言われ、古本丸が使用されなくなると実質的な主郭となりました。

常盤曲輪・常盤門
城の正面を守る曲輪として重要なため、土塀や堅固な櫓門が築かれていたようです。現在も塀の土台となった石列が残っています。

中城・北城
北方には大小2本の堀切り、東方の斜面には階段状の削平面が続いています。

古本丸(本丸)
享祿年間(一五二八〜一五三二)の火災により建物が焼け、その後再建されず本丸(二の丸)に主郭が移ったと言われています。

大野曲輪
空堀や土塁が荒削りなため、臨時的な曲輪の可能性も考えられます。

西城・若狭曲輪
城の西側は、緩やかな峰続きで敵の侵入を受けやすいため、土塁・横堀などを巧みに用いて堅固な防御を施しています。

釜ヶ入口
七曲口が整備される以前の大手口だと言われています。

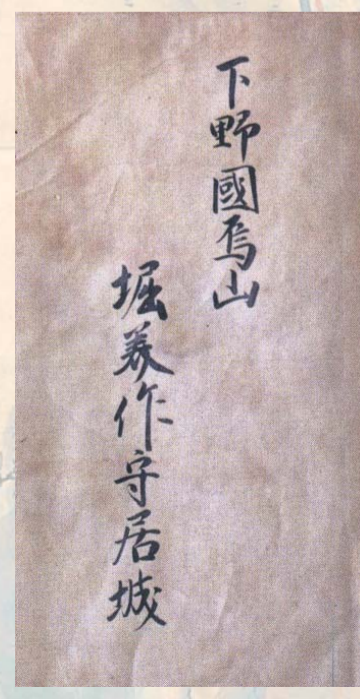
吹貫門
敵に対し横矢が掛かるよう、門の側面に石垣が築かれています。

正門
周囲を石垣、土塀等で囲み厳重な防備を施しています。一部に石列等も見られることから、正門に相応しい格式を備えていたようです。

太鼓丸(太鼓楼)
烽火台とも言われています。

七曲口
寛永十七年(一六四〇)、新たな登城口(大手口)として整備されました。

常盤橋(車橋)
堀切により通路を遮断しています。

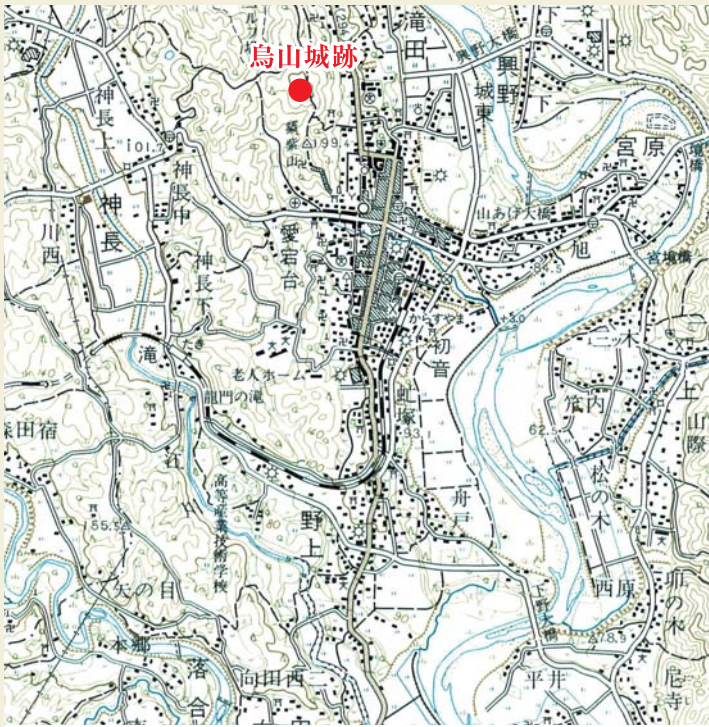


この「下野国烏山城絵図」は、正保城絵図に収められているものの一つで、全体の大きさは東西二m一九cm、南北二m四四cmです。

北東隅には「下野国烏山 堀美作守居城」と墨書されています。(左図)この「堀美作守」は寛永十四年(一六三七)から、寛文十二年(一七二二)に信州飯田(現・長野県飯田市)に移るまで烏山を居城としていた堀親昌と考えられています。

堀親昌の時代、万治二年(一六五九)年に山籠には三の丸が築かれ、城主の居館となりますが、この絵図は、烏山城が山城としての姿をとどめていた古い時期の様子が描かれており、大変重要です。

正保城絵図
正保城絵図は、正保元年(一六四四)に江戸幕府が諸藩に命じて作成、提出させた全国各地の城郭の地図です。書かれた当時の城内の建造物、石垣の高さ、堀の幅や水深など、軍事的な情報などが精密に描かれているほか、城下の町割・山川の位置・形が詳細に記載されています。各藩は幕府の命を受けてから数年で絵図を提出したとされています。



「国土地理院発行の5万分の1地形図(烏山)」

立地概要

烏山城の東側は大きく蛇行を繰り返し南流する那珂川、西側は江川、南側は那珂川と江川、荒川の3河川が合流する氾濫源、北側は大小の谷が複雑に入りくむ丘陵地帯と那珂川の蛇行によって形成された狭地となっています。この様に周辺の地形をも巧みに利用した要害の地を選んで築城したものと考えられます。

ACCESS



新幹線・電車

JR/東北本線(快速1時間30分▶宇都宮▶宝積寺から烏山線35分)
東北新幹線(40分▶宇都宮▶宝積寺から烏山線35分)

自動車

東北自動車道(宇都宮IC▶さくら▶那須烏山50分)
北関東自動車道(上三川IC▶高根沢▶那須烏山50分)
常盤自動車道(那珂IC▶常陸大宮▶那須烏山50分)

この事業は、平成26年度市内埋蔵文化財史跡等総合活用支援推進(埋文)事業費補助を受け作成したものである。



編集・発行
栃木県那須烏山市教育委員会事務局文化振興課
栃木県那須烏山市大金240
TEL0287-88-6224